

中村素堂

花園大臣の御許に始めて参りたる侍の名簿のはし書に「能は歌よみ」と書きたりけり。秋のはじめに、南殿に出でて機織の鳴くを愛しておはしましけるに、暮れば「下格子に人参れ」とせられけり。「藏人五位たがひて人も候はず」と申してこの侍の参りたるを「ただおのれおろせ」とありければ、まゐりたるに、「汝は歌よみとな」とありければ、畏りて格子おろしきして候ふに、「この機織をば聞かや。一首つかうまつれ」と仰せられければ、「青柳の」と五文字を出したるを、候ひける女房達、折に合はずと思ひたりげにて笑ひ出でたりけるを、「物を聞き果てで笑ふやうやはある」と仰せられて、「とく仕うまつれ」と仰せられければ、

青柳の緑の糸をくりかへし夏経て秋ぞ

はた織は鳴く

と詠みたりければ、萩おりたる直垂をおし出して賜はせてけり。とあるなどは、後にある「秋霧の上」という話と並んで、当時から相当有名な話として伝えられているらしいが、これは「十訓抄」の話がなければ遺りもしない一首であつたかも知れない。

こんな例はこの辺でやめ、自作の歌を書き集めてみずから保存する以外の歌集、すなわち編輯された歌集は歌を愉しみたい人、歌を作りたいたい人のために、その先例集として、勅撰の集もどのくらい大量な写本が作られたか、おそらく想像外の大量であつたと思うが、むかしは紙というものが非常に貴重なものであつて、万葉初期時分には官庁の公用文書でも長方形の薄い木片で（木簡という）書かれていたくらいで、勅願の古写経などを見てもその写経料紙の出納は随分嚴重で、御願経の末尾に何帳の紙を使つたと明記してあり、支給の状況も正倉院文書などによつてかなり観察することが出来るの

である。

したがつて「万葉集」のような貴紳から庶民までの文学を写すのは、どういう形をとつてどんな料紙に記されたものか、このころは当時の人々の間における文学の価値観とも関わるので、相当突っこんで調べてみたいものと感ずるのである。

しかし、まあこの万葉の写本の盛行は、どのくらい歌の世界を益したか、一種の写本では現在完本のない「万葉集」だが、写本中の傑作といわれる元暦校本、藍紙本、天治本、金沢本、桂宮本などを照合して見ると相互に欠を補つて、今日の完本が形成されるし、またその後代の研究文献量も莫大なものではあるが、この歌集には色紙風のものや、ちらし書き風の写本は極めて少ない。少ないのではなく、ないくらいである。

それに比して次の時代の「古今」「新古今」となつてくると、写本の種類も多いし、書写の仮名も非常に洗練されて流麗の極地に達してくる。これが茶道の掛け物や何かで珍重された古筆切の最たるものである。尾上紫舟博士のお話でも短歌の發達が草が、なの美しい發達を促し、さらにこれがその料紙の發展をも促し製紙芸術といわれるほどの豪華なものが出来ている。「巻もの」と通称される卷子本から帳というものの、帳の分散したものが敷紙になる。この敷紙に「ちらし書き」という一首、一句を自由に切り離して一枚あるいは数枚の紙に散布して書き、料紙と互いに美を映發して新しい芸術境を展開した。

言葉の調べが短歌世界の大事なものとなつてくる。次には幽玄の韻も協調されてくる。短歌は唄う文学から調べの文学となり、その調べ、幽玄の韻が尊重されると、仮名の繊細な線や点、あるいは連綿する線の流れにある情感を托して、美しい空間の創作も現出してくる。読む文学、見る文学がその視覚的なものに重点を置いて、視る言葉にまでなつてくる。(つづく)

「祭書」

「筆間雜記」中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。